

【座談会】

葬送儀礼と神道文化

平成二十七年三月十九日（木）

東京大神宮マツヤサロン



【出席者】

・池上良正氏

昭和24年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士課程。駒澤大学・総合教育研究部・教授（総合教育研究部長）、専攻は宗教学。主な著書『民間巫者信仰の研究―宗教学の視点から―』（平成11年 未来社）『死者の救済史―供養と憑依の宗教学―』（平成15年 角川書店）

・鈴木岩弓氏

昭和26年生まれ。東北大学大学院文学研究科博士後期課程満期退学。専攻は宗教民俗学・死生学。主な著書『いま、この日本の家族―絆のゆくえ―』（共著）（平成22年）弘文堂『変容する死の文化―現代東アジアの葬送と墓制―』（共編著）（平成26年 東京大学出版会）

・佐野和史氏

昭和22年生まれ。國學院大学大学院博士課程後期修了。瀬戸神社宮司・神社本庁教学委員。國學院大学兼任講師・一般財団法人神道文化会常務理事。専門は神道教化論。

【司会】

・武田秀章氏

昭和32年生まれ。國學院大学大学院博士課程修了。博士（神道学）。國學院大学神道文化学部教授（神道文化学部長）、専門は神道、皇室祭祀、近代日本政教関係史。主な著書に『維新期天皇祭祀の研究』（平成8年 大明堂）他論文多数。

【事務局】

・浅山雅司

昭和44年生まれ。一般財団法人神道文化会事務局長。神社本庁総合研究所研究課長・國學院大学兼任講師。國學院大学大学院博士課程満期退学。國學院大学日本文化研究所助手、神社本庁研修課を経て現職。

はじめに

浅山 本年は戦後七十年という、我が国にとつても、神社界にとつても、大きな重要な節目にあたります。先の大戦では、戦地はもとより、国内の数多くの街々でも非常に多くの方々が尊い命を擲られました。そういった方々の慰霊・顕彰は、今を生きる我々の大きな義務であると思います。特に近年、軍人や軍属を中心とした多くの方々の御霊をお祀りした慰霊顕彰の施設であります靖國神社について、首相の参拝の是非を巡って非常に熱い話題になっています。しかし、その争点は、常に「歴史認識」や「政治的な立場」といったものが中心に論じられ、日本人の信仰面に関わる議論、特に日本人の死生観、日本人にとつて死とは何か、人の魂・人の霊を祀るということはどういうことなのか、ほとんど議論されていないという傾向にあります。

そこで今回の座談会では、日本人が古代から持つ死生観や靈魂観、それに基づく葬送の儀礼、そういったものの変化について、民俗学的な見地ということから話を掘り進めていければと思っております。

現在、神道文化会では、日本文化興隆財団が主催する神道文化検定に対して、「協力」という形で参画しています。よ

り具体的には、検定のテキストの作成に積極的に関わり、特にこの二年間は『神社のいろは要語集』の「宗教編」と「祭祀編」の作成・刊行に携わってきました。『神社のいろは要語集』の二冊は、かつて國學院大學日本文化研究所（現・研究開発推進機構）が編纂し、本会が全五巻本として刊行、神道文化会設立六十五周年に全二巻に再編した『神道要語集』を基としています。神道に関する知識を広く一般に普及させるため、神道文化会の目的の一つでもある「良書普及」を目指して『神道要語集』をリライトする形で刊行いたしました。そういったテキストの作成の中で、神社・神道の祭祀を考える上で、民俗学的な視点も大切であるということに改めて実感しました。神社とはそもそも何だったのか、氏神とは何なのか、稲霊や穀霊等を祀るというのはどういうことなのか、それが神社祭祀の中でどのように扱われてきたのか。月次祭、宅神祭や氏神祭の説明に民俗学的な見地からの解説が加えられていました。

そういった状況の中で、鈴木岩弓先生が行われている葬送儀礼の変化を神葬祭の実施状況に注目した全国調査のお話を伺いました。たしかに、この戦後七十年の間で、人の魂を祀るということ、人を送るということが、大きく変化をしているのかもしれない。そういったことも視野に含めて、この座談会をきっかけに勉強させていただければと思い、今回

のテーマとさせていただきます。

以上が、事務局からの座談会のテーマの説明ですが、座談会の司会、また取り仕切りにつきましては、武田先生にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

死者との絆を求める現代社会

武田 國學院大學の武田です。よろしくお願いいたします。ただいま、事務局から本日のテーマ「葬送儀礼と神道文化」についての説明がありました。司会としましては、より根つこの部分、そもそも「死者との絆」、「人と靈魂との関わり」をどのように考えたら良いのかを中心に、先生方にお伺いしたいと思っております。

池上良正先生は、青森や沖繩のシャーマンをとりあげた「民間巫者信仰の宗教学的的研究」で学位を取得され、それ以降、靖國神社の問題も含めて、死者との個別的なかわり、靈的な交流、さらに「死者が救済されることによつて生者も救済される」というメカニズムを巡つて、深い思索を展開されておられます。

また、鈴木岩弓先生は、東北地方の民俗史を中心に研究をされてこられました。特に東日本大震災以降は、被災者の「心の相談室」の運営にも関わり、「宗教者がおのおのの宗教

の布教・教化の立場によらずに、如何にして人々の苦しみを癒やすか」という実践的な課題にも、積極的に立ち向かつておられます。本日の課題に関しては、余人の及び難い幅広い知見をお持ちになられ、最も深く考え抜かれておられる先生と思っております。

佐野和史先生は、かつて神社本庁で「本庁教学」の中心におられました。お宮に帰られたのちも、宮司として氏子の方々と接しつつ、多くの氏子の方々と関わりながら、地域における「神道教学」、神道の死生観や靈魂観についての思索を深めておられる先生でもあります。

これから限られた時間内ではありますが、このお三方の先生方に、葬送儀礼と神道文化の根つこにある靈魂観、さらに「死者との絆」の問題について、さまざまなご意見をお聞かせいただければと思います。

さて、これからの議論の段取りですが、まずは「現状」から出発したいと思います。さつくりと申し上げますと、「現在」というのは非常に不思議な状況です。もはや伝統的な信仰は解体して靈魂はもう「蒸発」している、という先生もおられるくらいで、社会は既に脱宗教化・非宗教化され切つているとする受けとめ方があります。

その一方で、とりわけ東日本大震災以降、「死者との絆、死者との邂逅」をあらためて希求するような動向が強くなつ



てきているようにも思います。

こうした相反する二つの見解があつて、それをどう捉えてゆけばよいのか、非常に悩ましいところがあります。こうした「現状」をどう捉えるか。お考えをお示しいただければと思います。

また、かかる「現状」によつて来たる由縁にも遡りつつ、その根っこにある日本人の死生観・靈魂観、さらには、「今後、死者との絆をどのように作り上げて行くか」という究極の課題についても、先生方のご意見を伺いたいと思つています。

まずは「現在の状況」、一見非宗教的ではあるけれども、同時に深いところで死者との絆が求められているような時代の動向を、どのように考えたら良いのか、という問題です。

まずは池上先生から、お話を承りたいと思います。

池上 まず「現状」です

か。むしろ現状の話であれば、私より鈴木岩弓先生にお話しただいた方が良いと思います。

武田 この座談会にあたつて、先生の論文やご著書を熟読して参りました。先生が、現在、この問題をどのようにお考えなのか、興味津津たる思いです。是非お考えをお聞かせいただければと思います。

日本の大衆化と多様化する死生観

池上 そうですね。私の場合には今まで何をやってきたかというのを振り返りますと、「主張されている宗教」と「生きられている宗教」という区分に注目してきました。仏教とはこういうものだ、キリスト教はこういうものだ、あるいは神道はこういうものだというような「主張されている宗教」、あるいは思想に関する研究から日本人を考えるというような発想は、非常に多いと思います。しかし、実際のところ、その宗教・思想が人々の中でどう「生きられている」のか。私はそこに研究のウェイトを置いてきました。

先ほどのご紹介にもあつたように、私の研究は、最初は東北とか沖縄の民間の宗教者の調査研究から始まっています。その過程の中で、たとえば「民衆のキリスト教」をどう考えるかということにも関心を持ちました。キリスト教とはこう



いうものだという聖書学や理念についての研究はたくさんあります。しかし、実際の日本の社会の中で、近代あるいは地域社会の中で、キリスト教会は人々にどのように受けとめられて、どのように「生きられた」のか、そういうことを中心に研究してきました。

今から十六年前、駒澤大学に赴任しました。私は在家の人間で僧侶ではありませんが、駒澤大学という曹洞宗の仏教系の大学に赴任したことで、仏教学の大学院で講義を持つことになり、僧侶の子弟を指導するようになりました。そういったことから、これまで一番関心が高かった「死者」の問題に着目しました。仏教的な文脈で言えば「死者の供養」というものを比較宗教学的に位置付けるような研究ができないだろうかと。そうい

った意味で、「死者供養の比較宗教学的研究」というテーマに関心をもってきました。

もう一つ、これも十数年前からなのですが、

中国大陸の寺院復興の調査研究に参加しました。そして「中国の寺院復興」をテーマに、毎年のように中国に行っており、現在の中国仏教といえますと、政治的な文脈で語られることが多く、一般の庶民がお寺にどう関わっているかという研究は意外に少ないのです。そんな中で、中国では寺院が復興しているが、どういうところに根つがあるのかに興味を持ちました。一言でいいますと、そこでも「死者の供養」の問題があつたのです。亡くなった人をどう弔い、またどう供養するかという非常に太い根っこが、「中国の寺院復興」を支えています。だから別に日本だけが「葬式仏教」であるとか、死者と関わりが深いというわけではありません。東アジア全体の問題として考えていかなければいけない問題です。そういうことに気づいて、いままで自分がやってきた調査研究を補う形で、宗教史的な側面や、比較文化的な側面に関心が広がっているところです。そういった意味でも、日本人にとつての死者の問題は重要だと思ふのですが、「現状」を大掴みにどう捉えるかは、なかなか難しいところです。

先ほどちよつと触れていた靖国神社をテーマに書いた論文（「靖国信仰の個人性」、國學院大學研究開発推進センター編『慰霊と顕彰の間』錦正社、平成20年7月所収）でも、これまで「集団性」ということで、政治的な賛否の中で考えられてきた靖国神社に対して、人々は具体的にどのような

に関わっているのかを取り上げました。一人一人を見ていくと、いろいろな側面を持っています。フィールドワークを基にして「個人」に焦点を当てて、「集団性」の中では、なにかと政治性を帯びてしまう神社に対して、人々はどういう関わりをしているか、そういう側面から靖國神社を考えてみようというのがあの論文でした。その後、靖國神社についてはそんなに展開はしていませんが、問題の関心はそういうところにあります。

メディアでは、今、様々に死生観の問題が取り上げられています。「死者が忘れられているのではないか」、「日本人の伝統性が失われているのではないか」という指摘もたくさんありますが、「現状」に関して一言だけ私と言えるのは、第二次大戦後の現代こそ、日本人全体を均質的に語ってしまえるような環境が、歴史の中で初めて出てきた、ということだと思います。戦前までは、例えば知識人と農民、都市の人間と地方の農山漁村に住む人、そういった人たちの間には、意識の上でも行動の上でも、思想や知識についても、非常に大きな差がありました。いわゆるエリートと呼ばれる人たちの議論と、民俗学が扱ってきたような民衆層との乖離というのは非常に大きかったと思います。これは歴史を遡っていけば遡っていくほど大きくなるはずですが、

ところが戦後の社会の中で、いわゆる「大衆社会」と呼ば

れるような社会状況が生まれました。特に近年では、知識人と呼ばれる人の発言が大きな力を持つのではなく、むしろ誰もがメディアやネットなどから情報を得て、自分たちの考え方を発信していく、というような時代になってきたように感じます。こういうことは今までは無かったのではないのでしょうか。エリートと大衆とか、知識人とそうでない人みたいな区別が非常に弱まってきたのだと思います。初めて日本人が、日本人全体のことを総体として語ってしまう状況が生まれたのだと言えるでしょう。もちろん現実には、一人一人は全然違います。「格差」の拡大ということも言われていますが、これは経済的な「格差」であって、知識や情報、思想の「格差」ではありません。いわゆる世界に向き合う視点や考え方みたいなものには、これまでの時代にあつた「格差」が無くなつてきているのではないのでしょうか。

そういう状況にあつて、最近、今日の座談会のような「日本人の死生観というのは一体何だろう」というような問いが多くなりました。これは日本人の誰しもが「日本人の死生観」について、理屈をついたり語ったりすることのできる状況が生まれたからこそでしょう。大学の教員とか、そのことについてよく知っている人達が集まって語ったものを、自分はその思わぬという発言ができ、自分なりに反省して批判し、そしてまたそれをレスポンスできる状況、そういうなか

「死」への観念の変化と消滅する「家」意識

で、均質的な「日本人論」といったものも議論になりやすくなっています。かつては知識人と呼ばれる人たちが議論をして、それが偉い先生が言っているということの上から下に浸透した。あの先生がそう言っているから、きっと日本人はこういうものなのだろうと。しかし今は、多くの人がそういう形で受けとめない社会になってきた。それが「現状」ではないか。そんな感じを受けています。

武田 池上先生に「現状」についてのお話をいただきました。そもそも昨今の学生は、四六時中、スマホを手に使っています。電車の中でも、スマホばかり睨んでいます。画面を通して、外の世界と繋がっているのでしょうか。それがグローバルイズムの然らしむところなのか、あるいはネット社会特有の現象なのか、よくわからない点もありますが、やはり社会において質的な変化が起きていることを感ぜざるを得ません。

そんな中、東日本大震災が起きました。その衝撃と変動につきまして、鈴木先生は、まさに東北という場所におられて、リアルタイムの実体験からお考えになられたことが多々あると思います。ぜひお話しいただければと思います。

鈴木 池上先生のお話に、最近になって日本の社会全体で均質的に「死」を語れるようになったとありました。それは私も同感で、「死の問題」というのは、昔は特殊な人達だけが論じていたのですが、今は「自分の死」「自分の儀式」「自分の墓」といったところで議論する、それが酒の肴になるといった時代になっています。その辺のことを、まずは自分の研究してきた流れに沿ってお話したいと思います。

私は修士論文を、飯豊山という山形と福島と新潟の間にある「山の信仰」で書きました。飯豊山の頂上には飯豊山神社という神社がありまして、その信仰について書いたのですが、その後の論文展開を考えたとき、一つの岐路がありました。

そもそも、なぜ「山」を選んだかというと、学生時代に探検部に所属していて、山登りが好きでした。ですから、自分の好きなことを対象として、自分の研究を進めていければ楽しいし、やりがいもあるということで、「山の信仰」を選んだのです。しかし、さらに「山の信仰」を深めて行こうとすると、「山の信仰」を研究している方の多くは修験の家の出身だったりします。自分しか見ることのできない文献を、自



分の家にいっぱい持っていたりします。つまり修験の末裔の研究者と競走するのではそもそも無理があると思い、初心に戻って、山に対する素朴な信仰、いわゆる民俗学的な観点からの研究をやろうと考えたのです。そこから、霊地といいますが、死者の霊が登る山、「山と死」という民俗的な側面への関心が強くなってきました。

研究を進めていくうち、何も「死」というのは「山」だけじゃなく、いろいろなところで「生者と死者の接点」があるということに気付きました。ですが、「あなたは何の研究をしているのですか」と聞かれたときに、「死の研究をやっています」とは答えることができない時代でした、一九七〇年代は。そこで私は、「祖先崇拜の研究をしています」とか、

「年中行事の研究をしています」とオブラートに包んで話をしていました。実際は、「死」の問題、「人が死をどう受けとめ、どう反応しているか」とい

うことに関心があつたのですが。

当時と比較して考えると、今はもう全然気にせずに「死を研究しています」と言えるわけです。社会においても、単行本のみならず、いろんな雑誌でも「死」を特集しています。

こうした変化がいつごろから出てきたかというと、七〇年代の終わりぐらいから顕著になったと思います。特に私が考える一番のエポックは、一九八六年一月号の『中央公論』に掲載された立花隆さんの「脳死」の刊行だと思っています。

先ほどの池上先生のお話にも通じるのですが、これを契機に「死は一つじゃない」ということが社会の前面に出てきました。たしかに、それ以前から臓器移植に絡んで、「脳死」という言葉がじわじわと世の中に出てきましたが、この記事で社会での定着が決定的になったと思います。それまでは死の「三徴候」、すなわち「心停止」、「呼吸停止」、「瞳孔散大」を基準に「死」を理解してきたのですが、その後で「死」は自分たちが決めることではなく、一種の「真理」として「死」が存在するものと考えていました。それが「脳死」という「三徴候の死」の代替の言葉が世に出てきたことで、「死」が選べるものであることを初めて知ったわけです。その象徴的な出来事が立花さんの論文だったのです。こうして八五年前後ぐらいから、「死」は「真理」ではなく「文化」であり、人為的に決めることができるという話にな

つてきました。そうしたところで、徐々に自分自身が「死」をどう迎えるかが、クローズアップされてきたのではないのでしょうか。お葬式の生前契約なんことが出てくるのも、それよりも少し後のことです。

ちょうどその頃、モンゴルに毎年行く機会があったのですが、そこで気付いたことがあります。行くたびに、丘が徐々に墓地になっていくのです。前の年に行ったときは緑の丘だったところが、次の年にはそこに点々と白い墓石が立っている。当時は、モンゴルでも「土葬」でした。どんどん丘が墓地に変わっていくよその国を見て、初めて「ああ、墓をつくるっていうのは環境破壊なんだ」といった認識を持つようになり、振り返って「日本はどうだろうか」と思いました。当時日本では、統計上既に一〇〇％火葬国でしたが、日本の墓地について関心を持つようになり、「人は何で墓を作るのか」ということについて、墓石に書かれている文字や書き方から、「墓に対する思い」を引き出せないだろうか考えるようになったのです。「墓に対する思い」は「観念」の問題です。「観念」というものは真正面から、「どう思いますか」と聞いても、自分自身でも意識していない部分があります。「死」の問題だけではないですが、そういった無意識の部分というものは、正面から聞いてもなかなか答えが出てこない。それよりもその考えに基づいて作られたモノを通じて、

その「観念」をあぶり出すことはできないだろうかと考えました。そこから墓碑銘の調査をするようになったのです。

これを日本全国規模で実施できれば非常に面白いのですが、さすがにそれはできていません。ですので、日本全体の傾向ではなく、地域的動向なのかもしれませんが、一定の傾向を見ることができていると思います。墓地の調査では、墓碑に「何年何月建之」と刻まれています。それを記録して整理すると、たとえば短い期間でも時代別に、家紋が減ったとか、家名が減ったということが判ります。仙台市で調査した結果ですが、九〇年代の半ば頃から、まず家紋が、次いで家名が少なくなっていました。「鈴木家代々」ではなくて、「愛」とか「絆」とか、「ありがとう」といったものが増えてきたのです。私が調べたのは、寺院墓地ではなく、寺の指導が入らない市営墓地でした。確かに「南無阿弥陀仏」と書いてある、いわゆるお寺さんが指導しそうなものもあるのですが、そうではないお墓がいつぱい出てきます。そう見ていきますと、墓を作るに際して見えてくる造墓者の「死」に対する認識が、八〇年代から揺らぎだし、九〇年代の半ば位から大きく変わってきているように思えます。

ここで考えないといけないのが、「家」という問題です。そのことについては、学生時代から気になっていました。鈴木木は大した家ではないのですが、母の実家が宮城県のいわゆ

る旧家で、大学に入った頃、母方の祖父の法事に代理で出席したことがあります。まさに昔の「家」制度をまだ色濃く残しているような場所です。その時、歳を取った親戚よりも、ずっと上座に座らされました。「なんでこんな若造がこんなところに座らされるのだろう」と思ったのですが、そんな経験が基になって、「家」というものを気にし始めました。

「家」という制度は、少なくとも戦後の民法からは消滅しています。そう考えると、「先ほど趣旨の説明の中で「戦後七十年」という言葉がありました。まさに「家制度崩壊七十年」になるわけです。」それまでは伝統的に「家」という概念がしつかり存在してきました。「家」を手掛かりにして、寺檀制度と本末制度を絡めることで幕藩体制が維持され、その結果庶民の葬式を仏教が担当することになりました。そうした「家」というタガが、それぞれの「家」でその「家」の死者の面倒をみるという制度化がなされました。その「家」が戦後民法で規定されなくなつて七十年、現在では意識の点からも崩れてしまつていゝるのではないでしょうか。先ほどお話しした「死の問題」とか「墓の問題」を考えていくと、その裏には「家」の制度、またさらに「家」の意識の消滅という問題があるのではないかと思います。私も『神社新報』を読んでいますので、神道の立場に立つ人たちが、「家」というものをとても大事に思つておられることは充分に理解して

いるつもりです。ただ、現実社会の中では、一般の人たちの間では、「家」意識は相当崩れていゝると思うのです。

「家」意識を考える議論では、柳田國男がよく取り上げられます。一般には、柳田は終生「家永統」「家存統」を論じていたと言われています。しかし戦後の柳田はその主張を取り下げ、「家は潰れても仕方がない」と戦後間もなくから主張を変えて主張しています。だからこそ、「家」が潰れて無くなつてしまつたとき、死者をどうやって祀ればよいのかを、戦後の彼は一所懸命に考えていました。例えば、同齡集團、つまり友達組織みたいなところでやるしかないのかなという模索をしておりました。しかし結局ご本人は、結論を出す以前に鬼籍に入つてしまつたわけです。この問題は、まさに今の我々が直面している問題なのですが、それを柳田國男は昭和三十年代、いや二十年代から氣がついていたわけです。その辺をどうしたらいいのか、この「家亡き時代の死者の行方」という問題は、近年の私自身の一番関心のある研究テーマとなっています。

先日、仙台仏教会の方で「イエスキリスト時代の死者のゆくえ」と題した講演をしました。そのときは「そんなことはまだ大丈夫ですよ」と言われる方もいらしたのですが、果たしてそうでしょうか。仙台市は都市化されていますから檀家さんはい多いのですが、過疎地のお寺さんでは檀家もなくなつてきて

います。そうすると、檀家という「家」とは別の、何か違う形の組織で死者を見ていくことになるものと考えています。

そう考えていくと「死」という問題には、課題がいろいろありますが、先ほど池上先生がお話されたように、日本人が「死」の問題を客観的に見るようになってきたのは、ある意味「家」が制度でなくなつて以降のことと言うことができるのではないのでしょうか。

「家」が崩れ、高度成長期を経て経済がどんどん発展していく中で、信仰という部分が、「世俗化」という言い方をしたりしますが、ちよつと薄くなつてきた時代にあります。さらには、徐々に医療技術の進歩が進み人の寿命がどんどん延びていく。そういうところに臓器移植や脳死なんていう話も出てきて、人間のもつ科学の力が「神の領域」を浸食するようになってきました。そういった「変化」がずっと続いてきたのが、「現代」・「現状」なのではないのでしょうか。

時代に応じて変化する葬送儀礼

武田 ありがとうございます。

池上先生からは、社会の質的变化が生じ、極めてホモジニアス（均質）な状況に社会がなりつつあるというご指摘いただきました。また鈴木先生からは、お墓の多様化に代表され

るかのような「死」の観念の多様化と、その裏側にある「家」の崩壊をご指摘いただきました。そういった状況は、あるいは行き着くところまで行き着いてしまっているのかもかもしれません。

こうした困難な状況は、佐野先生が、現任の神社の宮司として直面し、対応が迫られている問題でもあるのではないのでしょうか。そうした「現状」について、氏子さんの動向なども含めてお話をいただければと思います。

佐野 今、池上・鈴木両先生に、非常に的確なお話をいただいたので、あいまいな話にならないように、「現状」に対して、神職として感じていることについて、要点を絞っていくつかお話ししたいと思います。

まずは「葬送儀礼の変化」についてですが、お坊さんと違ってそんなに神葬祭が多いわけではありませんが、神葬祭に関わらず地域社会の中で、「あそこのおばあちゃん、最近見ないけれど」というと「去年亡くなつて身内だけで葬式を済ませたんだよ」という話がしばしばあります。つい先だって、も神葬祭を依頼されましたが、「身内だけでやりたいので、周りに知らせないで、神主さんだけ来てください」と言われました。私の身の回りでも、そんな形のお葬式が増えてきているのは確かです。今、「家族葬」とかいつていますけれども、「十日祭も帰家祭も出来るだけ省略してできませんか」



と言われることもままあります。「お前の教化活動が足りないからだ」と怒られてしまいそうですが、そういうところが増えてきている「現状」にあります。これは鈴木先生のお話にあった「家」の問題も含めて、核家族化の影響なのでしょうか。「死」の多様化は、確かに立花隆さんの「脳死」の記事の頃からじまっただと思いますが、いわゆる「家族葬」が増えたのはもつと最近ですね。この近年、急激に変わってきていると思います。

また墓碑銘の調査をされたという鈴木先生のお話がありました。納骨式のためお墓に行くと、今はどこに行っても「愛」とか「絆」とか、一文字のものが目に付きます。しかも昔からある縦型ではなくて、横型の墓石で。墓地の提供業

者や石屋さんの迷惑、分譲墓地の規模とか価格とか、そういった経営上の問題も絡んでくるのだと思います。が、需要と供給の関係は無視できません。需要

のある方へ値段をあわせて業者は動くのでしょうから。いずれにせよ、そういう社会変化がもたらした状況なのだろうと思います。

そういう変化は墓石だけではありません。このごろぼつぽつと出てきたのが、ビルの中のロッカー式の納骨ビルです。五十日祭が終わると納骨をするのですが、どこそこの駅前の何とかビルに来てくださいと言われる。行きますとエレベーターで6階に上がってくださいと連絡がある。6階に上がるとほどよい照明のある部屋がある。ガラスの仕切りの中でドアが開くと、その向うの扉があいて、納骨室が出てくる。中でそれぞれ納骨室がぐるぐる回るようになっていたのでしょうか。そんなことも出てきました。

こういう納骨というかお墓の変化についてですが、一つ思うところがあります。私の住んでいる鎌倉近くは、中世のお墓の遺跡である「やぐら」というのが非常に多い地域です。この地域でも、多分に漏れず、都市開発が進んでいます。特に急傾斜対策ということで、公の予算を使って山の崖地が崩れないようにコンクリートで固めようとするのが、次々と進んでいます。大体そういう場所には「やぐら」がずらずらと並んでいるところが多かったりするので。他にもマンション建設のための造成なんかで、「やぐら」が密集した少し大きな遺跡というのが、潰されたりしたこともありました。

「やぐら」の研究をしている人たちから話を聞くと、「やぐら」での埋葬の形式には歴史的な変遷が見られるそうです。

初めの頃は、それなりに有力な特定の個人のお墓が多いそうです。例えば、お坊さんであれば、そのお坊さんの「やぐら」の前に門弟の「やぐら」が並んで作られたりしていた。

それが、室町時代の中頃以降になると、「個人墓」ではなくて、「集団墓」になってくる。今となつては、どこの誰かわからない人の骨を全部そこに集めて同じ「やぐら」に納めたり、どんどん後から追葬していくような形式が、発掘の結果から見えてくるそうです。つまり、現代だけではなく歴史的にも、お墓の作り方やお墓の認識が変化した時期があった。「個人墓」であつたはずの「やぐら」の中に、いわゆる「捨て墓」的な形の「やぐら」が登場してきた時代があるのです。「捨て墓」的な形の「やぐら」に埋葬された人々は、おそらくはエリートでない人達です。そういう「やぐら」が登場する以前、民衆層の墓地がどこにあつたのかという問題もでてくるのですが、いわゆる庶民層のための「やぐら」が登場してくる時代があつたのは事実です。室町の半ば頃・戦国期にそういう変化の時期があつたようです。

神社のことに引き付けていうと、郷村制を基盤にした今日の氏子区域につながってくるような意識ができ上がってくるのも、ちょうどその頃にあたるのではないかと思います。今

は、そのころに生まれてきた認識が、崩れてくる時期になってきているのかなと。

そういう時期を迎えた「現状」の中で、先に柳田國男先生のような発想が大きな意味を持つのではないでしょうか。靖國神社の八月の「みたままつり」なども明らかに柳田先生の発想を引き継いでいくのだと思います。今の時代は確かに、池上先生も鈴木先生もお話されたように大きな変わり目にきていることを感じざるを得ません。だからこそ如何に近づけていくか、私たちが新しい解釈、新しい形を探していかなければならないという「現状」なのでしょう。

また、「死」を語る上での社会が均質化しているということについても思うところがあります。社会の中で、さまざまに「死」のことが次々と話題になったというのも、私自身もそうですが、いわゆる団塊の世代の影響があるのではないのでしょうか。この世代がある意味で、日本の国の世論を形成しているとも言えますから。それと、その世代にとつて、初めに「死」を考えたのは自分自身の「死」であつたかもしれないが、高齢化の進む今日、多くの人は六十歳過ぎる頃になつて、親の死にも直面するようになります。そういったことも含めて、一九九〇年代から二〇〇〇年代に入つた頃位から、急激に「死」への意識が高まっていったのではないのでしょうか。そういう意識、またその意識の変化もあつて、両先

生がお話されたような今の雰囲気・「現状」が生まれてきたと考えることも出来るのかなと思います。

武田 ありがとうございます。ただいま佐野先生から、社会の中では団塊の世代がマジョリティであって、その考え方が世論形成に大きな影響を与えているのではないかとのご指摘がありました。また、「歴史」の問題にも踏み込まれ、「現状」へとつながる流れが、中世半ばから近世にかけて形成されたものであるというお話もいただきました。

やはり「現状」の問題点を捉えるには、歴史的な経緯を踏まえなければなりません。

そこで次は、「現況」に至る故事来歴、歴史的背景を探って参りたいと思います。

我々は「現状」を、「本来のもの」が崩れた結果として受け止めてしまいがちです。しかしそれは、新しい時代への胎動として、ポジティブに受けとめることも出来るのかもしれない。

そういうことも含めまして、池上先生のお考えをお聞かせいただければと思います。

慰霊・供養の文化と「伝統」との関係

池上 歴史的要因を考える前に補足しておきたいのです

が、私はさつき「大衆社会」という言葉を使いました。今、先生方がおっしゃった「家制度」の崩壊、そういうキーワードで考えていけば、誰もが言うことですが、「個人化」というか「個人主義化」が非常に進行しています。個人が重視される社会というのは、一方で非常に良いことです。「個人」というものが大切にされる。「家制度」の持っていた拘束から個人が独立し、一人一人の意見とか、一人一人の生き方が大事にされる社会です。しかし、これもよく言われることですが、「ミイイズム」と言いますか、自己中心的になりやすく、非常にプライベートルな部分だけを人々が主張する。そういう社会になってしまう危険性も孕んでいます。

ただ仏教界の話をすると、別の見方ができるかと思いますが。私は仏教界を代表する立場ではありませんが、駒澤大学にいますと、各宗門の宗勢調査などにも目を通す機会があります。曹洞宗の調査を見ても確かに檀家の寺離れというのが深刻な問題になっていますが、ただ檀家数そのものが減っているかという、実はあまり減っていないのです。なぜかというと、世帯数が個人に分散しているからで、個人をつかまえてみると数自体はそんなに減らない。逆に言うと、大都市の個人的な供養を担っているお寺は、どんどん大きくなっていて、過疎化しているところは小さくなっている。確かに直葬とか、もう葬式なんか要らないとか、そういう人たちも増

えているのは事実です。しかしその反面、亡くなった人を何とかしないと、死者を丁重に扱わないと生きている人間は幸せになれない、といった感覚は意外に根強く存続しているのです。その現れが、お坊さんと呼んでお経を上げてもらうということです。だから「檀家」という認識や定義から離れて、「供養の文化」という言い方で捉えると、「供養の文化」はそんなに急激に衰退はしていないという「現状」も出てきます。

さつき「個人主義化」と言いましたが、個人の「ミーズム」がどんどん進むという弊害はいろいろなところで確かにあります。しかし、その一方では、今、テレビ番組なんかでも日本文化の伝統性とか、日本の良さを見直そうとか、そういう流れも確実に進行しています。逆にうるさくなるほど、「日本の伝統とか作法って一体何だったのか」ということに対する人々の渴望が見られます。「伝統への渴望」と私は思っているのですが、これは逆にとても強くなっています。これは今回の震災直後にもよく言われたことですけれども、「個人」がばらばらになっていくのは、やはり怖いわけです。自分自身の自己主張はするけれども、切り離されていく「個」をつなぎとめていくもの、何かずつと先祖からやってきたような伝統に頼ることで、自分自身を救いたい。そういう雰囲気、今、逆にとても高まっている。これは良い傾向

であると同時に、非常に危険な側面も持っています。「伝統」とか「日本文化」とか「作法」とかいюものが一体何かということで、それがイデオロギーの闘いになってしまふ。それが最近の傾向じゃないかと思っています。

そういうことを考えていくと、「歴史的な伝統」というものにもいろいろな問題がある。確かに、お墓の変化を追っていくと、「個人主義化」が進んでいるというのは、その通りだと思います。しかし、たとえば「〇〇家代々墓」というのは一体いつごろからあるのでしょうか。これも多くの研究者が言っていることです。遡つても、せいぜい幕末、むしろ近代に入ってからだということです。そういう一つ一つの様式の変遷のようなものを見ていくと、「日本人の伝統」などと言われるものも、意外にタイムスパンが短いかもしれない。

先程も話題に出ましたが、庶民が死者を弔うということを普通に行うようになったのは、せいぜい十四〜十五世紀頃だと言われています。十三世紀頃に上層階級で用いられていた共同墓みたいなものに庶民が結縁して、普通の人たちにも「供養」ということをしなければいけない」という考え方が徐々に浸透していきます。

それ以前がどうだったかという、これもよく言われるように、やはり風葬、野棄てです。古代では、家のそば、野原とか河原に平気で死体を棄てて、ほとんどその後は顧みない

場合も多かった。だから日本人は、昔から死者が身近な存在で、大切にしてきたというような考え方、柳田國男的な「山中他界観」のようなものも、一般化はできません。もちろんエリート文化では、記紀万葉の時代まで遡ることは可能かもしれないませんが、一般の人々の中で形づくられるのは中世末期から近世にかけてです。しかも、「家制度」という形で固定化するのはいくつ近代です。禅宗には「清規（しんぎ）」とか「行法書」という葬儀のやり方を指導する手引書があるのですが、江戸時代では個人の供養が中心になっています。「清規」や「行法書」の中で、家のご先祖を大事にしないといけない、というようなことを言い出すのは、むしろ明治に入ってからなのです。その頃から仏教界が「家制度」というものに傾いていき、だから近代に入って「〇〇家代々墓」なども非常に増えていく。

ですから「伝統」とか「日本文化」といった場合、一つの事例で見えていかないといけません。どの階層の話なのか、貴族階級の話なのか、庶民の話なのかということとを区別していかないといけない。その辺がごっちゃになると、「古代から一貫した伝統」だという話になりがちです。歴史研究の重要性というのは、あるものが一体いつごろから始まったのか、この風習はいつごろから庶民に浸透したのかなど、整理して考える必要があるということだと思います。

武田 ありがとうございます。お話を承りまして、なるほどと納得するところが多々ありました。「近代」でいいと思いますと、「国家神道」というイデオロギー的な鍵言葉のもと、「戦前日本は何でもかんでも国家神道」という研究動向がずっと続いています。それは、学問的な研究態度とは到底言えない、と思わざるを得ません。

池上先生は、中世の庶民層に「供養」や「施餓鬼」のような概念が定着し、それが「家」や「地域」の形成に伴って、「祭祀システム」として形作られていく筋道を指摘されておられます。目下、「家」を背景としたその「祭祀」が崩れつつある中から、あらためて「供養」的なものが「芽生えつつある」というのが、先生のお考えであると、私は受け止めています。

いかがでしょうか。

池上 「芽生えつつある」というか、その文化は非常に根深いと思っています。もちろん、人間は死んだらお終いで、死者なんか放つておいて良いという考え方を持つ人はいつの時代にもいますが、そういう形での「個人主義化」が一気に進んでいるとは私は見ていません。むしろ、「死者を救うこと」によって生きている者が救われる」という「死者との関係性」が重要だという考え方が持続している。それを「供養」という言葉でとらえるか、「慰霊」という言葉でとらえる

か、「追悼」という言葉でとらえるか、立場によつていろいろあると思います。そういう「死者との関係性」を繋ぎ留めて「死者」を幸せにしていくなことが生きている者の幸せに結びつくというような観念、というよりも感覚みたいなもの、これは案外根強いのではないかと思います。

武田 先生は、それを「伝統」とか「日本文化」という言葉で括るのはふさわしくないと、お考えでしょうか。

池上 確かにそれは「伝統」と言えば「伝統」なのでしょうが、その一つ一つを個別に考えていく必要があると思います。墓の形態はどうなのかとか、家族の実態はどうなのかとか、それから文化を受容した階層なども考えなければいけません。たとえば、よく日本人は先祖を大事にする民族だというけれども、「先祖観」というものが肥大化した階層は、古代と中世と近世では全く幅が違います。

そういうこと一つ一つを、地道な歴史研究の中に返していかないといけません。一気に「日本人には、こういう死生観がある」とするのは、「日本人」というものを「総体」として捉えてしまします。そういう安易に「総体」として捉えやすい環境が、現代にこそ生まれているのではないかというのが、私が最初にお話したことでした。誰もが「日本人」を安易に語つてしまふ、そして語れてしまふ。「現状」としては、個人一人一人の意見が尊重される良い時代ではあると思

うけれども、逆に、非常に大雑把な「日本文化論」とか「日本伝統論」とかが、横行してしまう危険性も含んでいる。だからこそ研究者がやるべきことは、そういうものに丹念にチェックを入れていくことじゃないかというのが、私の考えです。

宗教儀式の神秘性と伝統意識

武田 私も、それこそが研究者の第一意義であり、心構えだと思えます。しかし、その反面、「学問」と「宗教」は切り離せない面も確かにあるのではないのでしょうか。そういった意味で、私は、先ほど鈴木先生の「山に惹かれる。それがご自分の研究の原点である」とお話に、誠に共感するところがありました。

例えば、私は、先の伊勢の神宮のご遷宮で、遷御の儀を奉拝させていただきました。その際には、「今、まさに大神の御魂が動いていらつしやる」という生々しい臨場感を実感致しました。祭りにご奉仕する時の、歴史を飛び越えて「今そこに御霊がいらつしやる」「神さまがいらつしやる」という体感。それこそが、「祭り」体験の神髄ではないでしょうか。

そういう「経験」、ないしは宗教者・信仰者としての立場を、自らの学問とどのように調和させたらよいのか、私もか

ねて悩んでいるところです。鈴木先生はそういう問題についてどうお考えでしょうか。

鈴木 個人としての私には、すぐくロマンティストな一面があると思います。さつき申しましたように山が大好きです。山の神秘的な光景を見れば心を打たれて、「まさに神霊がいいます」という気持ちにもなることもあります。山の上で、いわゆるブロックン現象を見たときには、ああこれはクリスチャンが見たら十字架に見えるのだと、一瞬感激した経験もあります。けれども、研究者としては、ロマンティックにのみ生きるわけにはいかないと思っています。

先ほど池上先生も触れました「山中他界」という民俗学でよく使われる言葉ですが、この言葉の使い方には、注意が必要と思っています。「山中他界」というのは、山に神霊なり何らかの霊が籠もっているという考え方なのですが、この言葉を使う民俗学の研究者の中には往々にして「全ての山」という論理で語る方がいらつしやいます。

ところが実際に山に登ってみると、そういう山もあるのは確かですが、そうじゃない山もいっぱいあります。ですから、私自身、宗教民俗学を専門としているのですが、山を見たら直ぐ「山中他界！」と論を立てる研究者に対しては、同調できかね、「どこにその証拠がありましたか」と聞いてみたくになります。夢とロマンで「山中他界」を持つてくるのは

悪いとは思いません。しかし、近年の文部科学省の流行り言葉でいう、「エビデンス」を示さないことには無意味な思い込みに過ぎないと思っています。たしかに「山中他界」が成り立つ山もあるけれども、そうでない山もある。そういう事実を踏まえないことには、池上先生がそうなたら困るとお話されている、「大ざっぱな文化論」になつてしまふと思います。

文化論的議論の中では、小さいところは切つて捨て、大きいところをまとめればいいという言い方はあります。ただそれをやつてしまうと、例外が出てきたときには、批判されてしまいます。マスコミの世界ならそこまで目くじらを立てる必要はないかもしれませんが、研究者として研究するときには、それではいけません。

武田先生からの「歴史の問題」についてですが、それでいうと私の対象としているタイムスパンはすごく短いと思います。柳田國男自身も言っていますが、民俗学というのは、いわゆる文字に書かれたものではない部分を、今の時代に行う聞き取り調査などから遡っていく学問です。つまり、開始する場所は「現代」、まさに「今」です。だから、「現代」から見える範囲に時間軸をバックすることはできるのですが、時間を超えてポーンと飛んで「古代」とまで結びつけるというようなことは、できないと思っています。

私も宗教民俗学を研究する者として、伝統的神事をいくつも拝観させてもらっています。昔、拝観したある真夜中の真つ暗闇の中で行われていた神事を十年ぶりに拝観する機会がありました。十年前は真つ暗闇の中で行われていた神事だったのですが、提灯の明かりが煌々とした中で行われていたののであつた経験があります。不思議に思つて「いつごろから提灯を点けるようになったか」を聞くと、「提灯を点けるのは、昔からの伝統です」という答えが返ってきました。高々十年の差なのですが、そうした使われ方をしている点からは、「伝統」という言葉も「曲者」だと思えます。例えば、昔、高円寺の「阿波踊り」を調査したことがあります。始まつて三年目の新聞の見出しには、「伝統の……」と書かれていました。十年もやつていなくても「伝統です」と言うところから「歴史」が始まつたような感じになつてしまう。このあたりも「言葉のマジック」と言いますか、気をつけないといけないことだと思います。

私の研究は今から遡れる限りですので、今日のテーマにあつた古代の日本とどうつながるのかと言われると、直接のデータ、「エビデンス」が、私にはありません。従つて私が言えることは、池上先生がさつきからお話されているような、庶民がお墓を作るようになってきて以降ということになります。例えば、仙台の農村地帯に行くと「フルオハカ」という

ものがあります。考古学ではコボと言うようですが、田んぼ脇の茂みの中などに、明らかに人為的に置いたと判る丸つこい石がやたらとあつたりします。話を聞くと、「あそこは○さんちのフルオハカだよ」という答えが返ってきます。そこから判るのは古いお墓だということのみで、残念ながら文字が書かれたり掘られたりした石は確認されません。そうした頃以降の歴史が、私の遡れる「歴史」になるわけです。

「土葬」から「火葬」への変化

鈴木 その「歴史」を踏まえると、私は「土葬」から「火葬」への意識の変化というところに関心があります。実は、東日本大震災の際、宮城県では「土葬」が行われました。これは気仙沼大島の事例ですが、震災直後、遺体があるけれども船が出せず火葬できなかったのです。三月十一日に地震があつて、ここで宮城県内最初の土葬がなされたのが三月二十一日でした。厚生労働省や警察からも許可されたのですが、三年以内に「火葬」で「改葬」するから「土葬」はあくまでも「仮埋葬」ということでした。しかし最終的には、半年ちよつと後の十一月十九日、宮城県で土葬された二千八百八体全部が「改葬」されました。

これは「土葬」から「火葬」への意識の変化を見る上で、

非常に興味深い事例だと思います。今、少なくとも宮城県では、「土葬」が忌避されているのです。宮城県自体は、「火葬」が八〇年代に、全国平均を超えて一〇〇%近くになりました。「土葬」は多くて年間四〇〇体ぐらいですが、毎年約二万人が亡くなる宮城県では、統計処理からはほぼ一〇〇%近くの真っ直ぐなグラフになります。私が以前調査した七〇年代では、おばあさんたちに「このごろ火葬が増えていますね」と言うと、「嫌だね、火葬は。死んでまで熱い思いをしたくないよ」という答えが、たくさんの人から返ってきました。だからあの頃は、当時の年寄りの中では「火葬」というのはもつての外で、「土葬」にしなければならぬという価値観をもつ人がたくさんいました。それがあつという間に変わってしまった。グラフから見ても、傾斜がすごいのです。全国平均より遅かったものが、あつという間にそれを追い抜いたのです。

十一月に「改葬」した時のご遺体はすごい状態だったわけで、「清月記」という大手の葬儀屋さんが、その「改葬」の模様について、報告書を出しています。それを見て、もう宮城県は「土葬」ではなく「火葬」地帯なのだということを再認識しました。時間的変化で言いますと、タイムスパンとはずつと短いですが、ものすごい変化が起こっています。

そういった「地域性」ということでは、今、私が関心を持

っている「神葬祭」も、関係していると思っています。私は震災前から福島県の相馬を調査しているのですが、相馬は、吉田神道の終焉の地と言われ、「神道護摩」を焚く祭壇のある神社もあります。その関係か、宮城県と比べると、福島県は「神葬祭」が多い地域です。なぜ「神葬祭」が多いのかを考えると、吉田神道がどうして出てきたのかというところにも、関わっていると思います。江戸時代は、お上が寺請制度という形で、お寺に死の問題を扱うお墨つきを出していました。それが、ずつと時代が下ると、神職も仏式にしなければならぬということに反発が出てきた。そのころ生まれてきた「神道もちやんと『神葬祭』をやったほうがいい」という考えが生まれてくる。だから近世期に、それを形づけ、教化しようという動きが出てきたのだと思います。その中心にあったと思われる吉田神道も、幕末以降福島・相馬という場所で終焉を迎えた。そんな時代と共に浮き沈みがあつて、何かしらのつながりがあつて、今に繋がってきている。

「歴史」という意味でもそうですが、そうなる「地域性」というものが、非常に強く出てきます。例えば、「骨葬」というのも、その一つです。葬式時の祭壇に安置されるのが遺体ではなく焼骨となる葬儀ですが、東北地方では多く見られます。以前、東北中の葬儀屋さんに「葬儀の何%が骨葬ですか」という調査をしたことがありますが、「ほぼ九〇%」と

というのが大半でした。相馬と会津と庄内がちょっと少ないですが、それ以外は皆「骨葬」が主流のようです。「骨葬」自体は、長野や九州など他の地域でも確認されますが、東北地方は特に多い「地域性」があります。だからお葬式に行ったらご遺体がないのが当たり前で、最後のお顔拝見なんてあり得ない。そういうことが常識の地域になっている。しかし、それは「土葬」時代には無かった習俗です。やはりこれは「火葬」になって焼骨が出てからの話です。「火葬」がどう入ってきて、それによって「骨葬」をどう取り入れたか。そう考えていくと、明治の終わり頃から大正・昭和の初め辺りに、新たな「地域性」が出てきたと言えるのではないかと思います。

「個の死者」への対応の必要性

鈴木 最後に、池上先生の重視されている「生者と死者とのつながり」についてですが、とても教えられることが多いので、非常に重要だと思います。それに関して、震災をきっかけに、感じたことがあります。宮城県の名取市閑上には日和山という、山頂に神社があつた六メートルほどの築山があります。震災時にはその山を超えた八メートル以上の津波が来て、お社などを押し流し、閑上の町自体も壊滅してしまいま

した。日和山山頂からは被災した町の後が一望できるので、多くの人が集まる「聖地」になっています。今、その山の脇に大きなモニュメントが建てられているのですが、そのモニュメントができる背景のことをお話ししたいと思います。

震災の直後から、何度も閑上に入って、地元のおばあちゃんたちといろいろと話をしましたが、こんな話を聞きました。震災から二年目ぐらいになって、ようやく泣けるようになったと。それまでは、泣くことすらできなかったそうです、ショックが大きくて。助かった方でも、自分の周囲には家族を亡くされた方かなりおられます。そういう状況で泣くということがなかった。それが震災二年後ぐらいになって、やっと泣けるようになってきた。しかし、泣けるようになってきたのに、とても困るのが、いわゆる「依り代」がないということでした。家も流されて土台しかないわけです。写真が残っているわけでも、過去帳があるわけでもない。もちろん位牌なんありません。じゃあ墓地に行ったらどうかというと、墓地も全部墓石をひっくり返されて、カロート（墓の納骨部分）も津波に洗われているので、中にあつた「焼骨」も全て流されています。つまり、死者を偲ぶ「依り代」が何もないのです。何に向かつてどうしたらいいのか。人によつては、日和山から町を見渡して、手を合わせている方もおられます。しかし、もつと死者との接点が欲しい。慰

霊碑を作ること、それを通じて自分の近しい死者と接することができるといいます。そういった人たちが力を合わせ、市に働きかけて、大きなモニュメントが建てられました。その後も慰霊碑が、各地にさまざまな形で作られ続いています。やはり死者との出会いの場というのは、本当に必要なのだということを痛感しました。

武田 神社が復興されたのではなくて、碑が建つたのですね。

鈴木 神社が復興したお話もあります。藤波祥子さんという女性が宮司をされている巨理郡の山元町の八重垣神社などはそうです。震災前は木のいつばいあるいい神社だったので、浜に近かったので建物は皆津波に流されました。その神社では間もなく仮の社殿が設けられ、復興されていらつしやいます。

震災を経験して思ったことがあります。今、私は「臨床宗教師」といつて、布教するのではなく、宗派・宗教を超えた形で宗教的なケアをできる宗教者を養成する活動を行っています。そこには、今まで延べ九十五人の方が来てくださいましたが、神社神道の立場からの参加者が少ないことが気になっておりました。それに対して教派神道の方はいつぱい来られます。そうした理由は何だろうか、と考えております。何が言いたいかというと、今、被災地で求められているのは、

「個の死者」へ如何に対応するかということなのです。そうした時、神社神道が得意なのは、「群の死者」だと思えます。神社神道の方々は、多くが合同の慰霊祭という形で被災地に入る場合が多いのではないかと思います。それに対して、今、被災地の人々のもつニーズは、「震災死者」全体に対するのみならず、「津波のときに手を離して死んでしまったおばあちゃんを何とかしてほしい」といった、具体的な「個の死者」への対応なのです。これは、神職の方が何もしていないと言っているわけではありません。もちろん、神社神道の関係者も非常に献身的に被災地に入っていらつしやるのですが、ご自分の神社とは無関係の被災者に対して、その人の身辺に出た「個の死者」への対応を神道的に行うと言うことが難しいようです。どうもこの辺、神道と仏教ではシステムというか、死者との対峙の仕方に違いがあるようです。さらにこうした死者との関係は、神社神道より教派神道の方がやりやすいようです。これは「神葬祭」にも言い換えられるのかもしれない。教派神道は「神葬祭」に関して、いろいろなことを考えているようですので、その辺のノウハウがあるからなのかもしれないですね。

やはり、神社神道からの死者へのコミットの仕方と、仏教者やクリスチャンのコミットの仕方が、ちよつと違うなと感じています。まだその辺をきちんと整理できていませんの

で、上手くお話してできませんが。

武田 神社界には耳の痛いお話が相次いでいます。「伝統」とか「日本文化」という言葉は、『神社新報』の論説に、頻出する鍵言葉ですが、それを安易に使うのではなくて、もつと慎重な吟味の上で用いるべきだ、というご提言でした。

鈴木先生のお話の最後で、神社神道は「群れの死者」は祀るけれど、「個の死者」には冷たいのではないか、神職は「個の死者」を置き去りにしているのではないか、とのご指摘がありました。これも耳の痛い指摘です。神社神道を代表する者として、一言なかるべからず、ということ、佐野先生から反論をいただきたいと思います。

日本人の「死者」に対する倫理観と祭祀

佐野 鈴木先生に勝る一言はありません。少し話はずれるかもしれませんが、最近、なにかとイスラムが話題になるものですから、いろいろな新書版などをめくって感じてきたことがあります。創造主を想定する一神教の「倫理」は、神が与えてくれた「倫理」であって、それが多神教である日本とはかなり違う。あるいはもうちよつと広く多神教圏にある東アジアといつてもいいかもしれません。一神教的な「倫理」

がないとすると、その「倫理」を与えてくれるものをどこに求めているのかということになる。仏教的な仏の悟りというものがあったとしても、それはかなり弱いと思います。今のお話に出てきた日和山に慰霊碑がほしいというような、死者との結びつき、生者と死者とがいかに結びついていくかというところが、ある意味で日本人の「倫理観」の基になっているということを、今日の両先生のお話を聞きながら、改めて感じました。

ただ、その生者と死者との結びつきというものが、歴史的に見て単に「伝統」という言葉では括り切れないような、さまざまな変化があるのも事実です。しかし、その生者と死者とのつながりを、自分自身、感じていかなければならない。それが生者の生き方、一つの「倫理観」として、おさまりのつくものにならないといけない。そういう感覚が、求められていると思います。そうしたことからも、今、「死」というものが、大勢の日本人にとつて必要になつてきていると感じています。

グローバル化というのが日本に押し寄せてきたときに、一方でヨーロッパ型の倫理観、一神教型の倫理観ではどうも納得できない。そういう感覚があつたのではないのでしょうか。立花隆さんが「脳死」を書かれたときにも、それがあつたかもしれないなんて、今、思っています。その中に「個の死

者」と「群れの死者」という枠組み・用語を提示していただきましたが、なるほどと思います。

私は「神葬祭」の話をするとときに、「神社とは何ぞや」ということと「神道とはなんぞや」ということを、区別して考えなければいけないと言っています。ある意味で、このあたりを、ごつちやにしがちなところがあります。特に祭式の先生なんかがそうなのですが、「神社祭式」と「神葬祭の祭式」を同じ理屈で語ろうとすることがあります。しかし、少し区別しなければいけないだろうと思います。この場合、「祭式」と言っても行事作法や次第のことではなくて、その「祭祀」自体の意味を含んだ、行事やその目的も含んだ概念としての意味で、「祀り」と言ってもいいでしょう。いわゆる「神社祭式」は「群れの祭式」であり、その位置づけの中で、正しい意味での「国家神道」をもっとアピールしていかないといいません。一方で「個」の祀りということを考えた場合、「個の祭式」ということもあり得ます。神社の祭神を祀る「祭式」と個人・故人を祀る「祭式」には、本来的に違いがあったはずなのです。そういう意味では、さつき「家」が崩壊したという話になりましたが、「家の祭式」という考えも成立しますし、かつてはそういったものもあったと思います。神社を単位すると「一社の故実」という言い方があり、「家ごとの故実（祭式）」というものも想定できます。

「ウチのお正月のお雑煮に何が入っているか。隣とはちがうお雑煮だけだ。」なんていう例え話的な説明が判り易いかもしれません。そういったことを前提に考えた上でないと、「個の死者」とつながることができない。神社神道的な立場から、個人、個別、個性というものを尊重すると、神職というものは、その個人・個性に対する「祀り」に対しては、他者になります。そこで、他人の魂を「祀る」というときに、なかなか踏み込めない要素があるのではないかなと思います。だから「個の死者」に対して、二の足を踏んでしまう。そういう要素が神社神道の特色の中にあるのではないでしょううか。

この「自他の別」みたいなものを突破して良いのか悪いのかわかりませんが、ただ、今の時代の中で、何らかの形でアプローチ、あるいはコンタクトしていく可能性を見つける努力が必要かもしれません。「わたしの祀り」と「あなたの祀り」は違うのだけれども、その中で一緒に祀りするにはどうしたらいいだろうかというような、そういうアプローチもこれからの神社神道にとって必要なのではないだろうか、と、問いかけられたのかなという感覚で、今、受けとめさせていただきます。具体的にどういうあり方が良いのかは、これからも研究させていただきたいと思います。

個人主義化に対応してゆく神道

池上 今のお話に関係して、確かにその通りだと思うのが、「神葬祭」についてです。「神葬祭」のモデルになったのは儒礼、いわゆる「儒葬」です。儒教でも、当然のことながら親や先祖は大切に祀りますが、自分の一族以外の「他者」の死者を祀ることは、淫祀として禁じます。つまり自分自身の身内の「先祖」だけを祀る。それに対抗して仏教徒は、三世因果の法などを掲げて「すべての死者」を祀ることを前面に打ち出しました。儒者が主張する死者の祭祀は狭すぎるのではないか、という主張が、中国でも唐代から宋代にかけて、儒者に対する仏者の議論の中で続いています。

「祭祀の集団性」については私自身もずっと気にしてきました。確かに、神社が一番得意とするのは「地縁・血縁の共同体」ですね。そういった中、キーワードで言えば「個人」や「個人主義化」が尊重され、むき出しになってきている社会状況において、どういう形で「共同性」や「集団性」を掬い取るかというときに、「日本文化」とか「伝統」といった言葉を使いそうなのが神社界だと思っていました。ただ、それだけではなく、「個人化」にどう対応していくかも課題であるというふうに、今、お聞きしました。

私も靖國神社の論文で、靖國神社の祭祀は「集団性」一本に見えているが、戦後のいろいろな工夫の中で「個」に対応するものが実はしっかりと存在していることを、「永代神楽祭」「花嫁人形の祭祀」「遊就館の個人写真」という三つの事例から指摘しました。これは、日本人という「共同体の祭祀」を得意とする神社界からすると、もしかしたら違った形なのかもしれないと思ったからです。

論文でも触れましたが、遺族の方から聞き取った戦前のエピソードがあります。息子が靖國神社に祀られているお母さんが、息子のために「ぼたもち」を持ってきたら、「ここは恐れ多くも天皇陛下が全てをお祀りしてくださるところで、そういうものを個人であげてはいかんのだ」と怒られたという話があります。これは、別に靖國反対派から聞いたのではなくて、遺族の方が自らそういう話を盛んにされています。だけど現代の「永代神楽祭」はすばらしい、とおっしゃるのです（永代神楽祭とは、靖國神社で毎日開催され、当日が命日にあたる戦死者の遺族が昇殿して営まれる祭祀）。参加者のなかには、「永代神楽祭」と言わずに「永代供養祭」と言つて、それを受けとめている方もいる。間違いはあるのですが、やはり故人の命日の「供養」として受けとめておられるのです。

私がフィールドワークをやってみて一番驚きだったのは、

そういう「個人主義化」への対応というものが、あの靖國神社にもしつかり芽生えていることでした。それは何かヒントになるのではないのでしょうか。もちろん「個人」が良くて「集団」がだめだという話ではありません。「集団」の大切さを強調する文脈で、最近によく「絆」という言葉が好まれています。「地縁・血縁」を得意とする神社界が「集団性」や「絆」を取り戻すときに、先程の話にあつたような、他人の「死者」には手を出しにくいというようなタブーみたいなものがある中、どういう形で「個」の魂まで救っていくか、どうやって異質の他者との絆を結び直すところまで広げていくのか。神社界にとって非常に大きな課題かなと思います。

一 神教世界と多神教世界における「死者」との関係

池上 それから一神教との比較ですが、一神教と多神教を大雑把に比較するのは少し危険かとも思いますが、私自身も佐野先生に同感です。基本的には、キリスト教、イスラームの場合には、「死者」は絶対の神様に全て任せておけば良い、むしろ生きているものが個別の「死者」に対応してはいけないという考えがあると思います。だから、たとえばイギリスなんかでは幽霊はちつとも怖くないのです。怖いのは、サタンでありデーモンです。これは絶対的な悪で、絶対的な

神様と敵対するものは怖い。しかし、死者は全然怖くない。それは地獄へ行くか天国に行くかを神様にお任せしてあるからです。確かに、一神教文化圏でも「死者の追悼」というメモリアルがあります。ただその場合の「追悼」は、あくまでも「死者」を思い出して、それを神様にお任せするという形です。

ところが、東アジアでの「死者」との関係性やそこで発達してきた文化では、大雑把にいつてしまえば、絶対的なものに任せるのではなくて、自らが「死者」との関係性の中で何かを実践するという事に集約されると思います。それは「弔う」という行為であつたり、「供養」という行為であつたり、「慰霊」という行為になります。亡くなった方々に対して、自分たちが何かすること、自分たちにも救いがくるし、自分たちも幸福になると考えている。こういう実践のあり方は、一神教文化とは非常に異質のもので、さつき「根強いのではないか」といったものに関連しています。

これに関連して「倫理観」についてですが、これも佐野先生のおっしゃる通りだと思います。一神教文化では、絶対的な神様との間で倫理観は決まってきました。絶対的な神様が「倫理性」そのものですから、「死者」は別に放っておいて良いわけです。ところが、絶対的な神様のいない多神教的な文化の中ではそうはいかない。「死者」と生きている者の間

で、その「倫理性」を保ってきました。たとえば、さつき言った「個人主義化」の問題で、人間が傲慢になったり、ミーズムに走ったりして、非常に自分勝手に生きていこうとするときに、どこで「倫理性」を調整するかというと、「死者たちの目」のようなものを想定してきました。「ご先祖様が见ているよ」という言い方は日本人にとつて、「倫理性」を保つためにも有効な意味を持っていました。

しかし、「死者」にはもう一つの側面があります。見守ってくれるご先祖様だけではなく、いわゆる「苦しむ死者」があります。そういった意味でも、「死者」は危ない面も持っているわけです。一般にいう「死者のタタリ」のような話です。私は研究の中で仏教の「施餓鬼」を取り上げた時に、「苦しむ死者」「浮かばれない死者」が怖い、それに対する「畏れ」というものが、根強く持続していることを改めて感じました。その「怖さ」を利用した靈感商法みたいなものは困るけれど、そういう「怖さ」は、東アジアの人々にとつて、生きている者の暴走に歯止めをかける役割を果たしてきたと思います。つまり、「タタリ」があるかもしれない、だから亡くなった人々を大切にしないといけないという考え方です。

「死者」との関係には、「懐かしいご先祖」と「タタリ」的な「浮かばれない死者」や「苦しむ死者」の二面性があります。

す。どちらも、絶対的な神のいない文化の中で、生きている者に対する「倫理性」を保証してきた部分があると思うのです。そういう意味で、佐野先生のお話は非常によくわかりますし、私も非常に大事なことだと思っています。

「家」の存続と祭祀の継承をめぐる問題

武田 今のお話に関連して一つお聞きしたいことがあります。

先程の鈴木先生のお話の中に「家制度崩壊七十年」、「家なき時代の死者の行方」という話題がありました。今までは、祖先や死者を祀る主体は「家」でありました。ところが「個人主義化」、さらには「ミーズム」の潮流の中で、「家」が崩壊しつつあり、これからは「家」が祖先祭祀を支えるものというのは、難しくなるだろう、というお話だったと思います。

今後の「祭祀の継承問題」に関して、池上先生のお考えもお聞きしたいと思います。

池上 鈴木先生が話されたのは、いわゆる「家制度」の「家」のことだと思います。現代でも「家族の重要性」というものは変わっていないと思いますが、その中に、いわゆる旧民法で保証されていたような家父長的な「家制度」という

ものが、どこまで維持されているかということを考えると、それはもう風前の灯ではないかというお話だったのではないかと思います。

しかし、「個人主義化」といつても、「個」が全くバラバラになってしまっているではありません。むしろ「核家族化」を含めて、「家族」は「個人」をつなぎとめる最後の砦という意味で非常に重要になっていて、逆に、家族が重た過ぎる状況も一方ではあります。

今、「家制度」が一番根強く残っているのは、何とお寺なのです。息子がいないと寺が継げないという話題も良く出ます。寺院や宗教者の方に「家制度」の根強さがあつたとしても、一般の多くの人たちが旧来の「家制度」をずっと維持していくということはなかなか難しい時代になっています。そういうことではないでしょうか。

武田 ありがとうございます。柳田國男の『先祖の話』には、「家」が絶えるという危機感の中で、その祭祀をいかに続けるか、ということが論じられています。昭和二十年、連日続く空襲警報の最中で、『先祖の話』が執筆されました。だからこそ、「家」が絶える、「家族」が無くなるといったことに、非常な危機感があつたのではではないでしょうか。

しかし、そういった中で、「家」をいわゆる袋小路の中に押し込んで「家」を終わりにするのではなくて、「新しい考

え方」というのが生まれてこなくてはならない、ということを柳田は述べています。

先程、池上先生がお話になられたように、祖先を祭る「家」の祭祀がなくなってしまうと、「ご先祖様が見ている」という倫理観が消滅するということになってしまいます。柳田は、必ずしも直系の子孫が祭祀を継承するのではなくてもいいのではないかと、血縁にないものが継承してもよいのではないかと、ということについても言及しています。いわゆる制度としての「家」ではなくて、祭祀を継承してきた受け皿としての「家」、もちろん「家庭」という意味も含めての発言であると思います。そういったことについては如何でしょうか。

池上 「ご先祖様」という言葉から連想されるものは、時代によってかなり違ってきています。現代でもそういう「ご先祖様が見ている」という倫理観が成り立ち得るとしても、それはいわゆる旧来の「家制度」ではない可能性が高いということは言えるでしょう。

鈴木 『先祖の話』についてですが、柳田國男は日本人が「死者」を祀るということを、「家制度」の中での「先祖」と「子孫」という関係で説明しています。つまり、これまでは「子孫」というのは「先祖」を祀る役割を期待されてきた。しかし、それが南の島で若くして結婚もせず亡くなつてい

った人がこんなに出ちやつてどうするのだ。だから今までの制度をちよつと変えて、子孫を残さなかったその人を、上手く「家」の中に入れることはできないのだろうかということを書いていきます。

ただそれを書いた『先祖の話』は、実は三回ぐらい書き直されているのです。そして、柳田自身は、戦争が終わってまもなくから「家永統」の主張はすっかりやめ、「消滅してもしょうがないのだ」と言っています。特に晩年の頃に『河北新報』で対談しているのですが、そこで「もう家なんて崩れちゃいますよね」と自暴自棄的に言うと、相手の方から「いや、でもまだそういうのは続くでしょう」という答えが返ってきた。そうすると、かなり感情的に「ああよかった、それはうれしいことを言ってくれる」と喜んでいるのです。つまり柳田自身、本音では、「家」がなくなることのいいと思っているのじゃありません。「家制度」がなくなったら、死者を祀ってくれる子孫がいなくなつて、いずれ戦後の日本はだめになつてしまう。その代替に何がいい方法がないかと考えているのです。例えば「友達」だとか。ただその「友達」に関して言えば、今は「女の碑の会」とか、「もやいの会」とか、「墓友」というのがありますね。これつて、柳田がいう「友達」なんですね。将来、同じところに入るといふこととか、生きているこの世で仲よくしましようという「疑似家

族」を作っています。一般に「伝統保持者」だと思われがちなのですが、実は、戦後の柳田は世の中の新しいところの先を読んで、ぼんぼん変わった視点を引つ張り出しているのです。

武田 柳田は『先祖の話』の中で、物事は世につれて変わっていくのだけれども、変わる前のものにしつかりと向き合うこともまた重要だと述べています。大切な指摘だと思います。

鈴木 はい。それで文字になる前はどうかということとで、民俗伝承の話になるのですけれども。そういう意味で、柳田の指摘を引つ張つてくると、「家」自体はなくなるかもしれないけれど、「家」的なものは必要だという模索が、晩年の彼の中にあつたのではないかと思います。

佐野 今のお話の中に「祖先」という言葉と「子孫」という言葉が出てきました。「祖先」と「子孫」ということと言えば、「祖先崇拜」という言葉はありますが、「子孫崇拜」という言葉はありませんね。少し極端な言い方かもしれませんが、「子孫」に対する責任感といふような感覚を、もつと現代人は考えていく必要があると思います。それが「死者」と「生者」の関係性から生まれる「倫理観」に厚みを持たせることが出来るのではないのでしょうか。「祖先」に対しての一方通行だけではなく、「子孫」に対する責任を持つというこ

とが一つの「倫理観」の原点にもなるはずです。「家」なり「家族」なりを念頭に置いて、「祖先」と「子孫」につながる「倫理観」を考えていく必要があるのかなというのを感じました。

武田 ありがとうございます。まだまだ、いろいろお話を聞きしたいのですが、残念ながら時間が迫って参りました。最後にお一方ずつお話をいただきたいと思います。

やはりどうしてもお聞きしたいのは、これからの日本社会で、「死者との絆」、その霊的交流を、どのように作り上げていけばよいのか、という問題です。勿論、一筋縄ではいかな問題ですが、その方向性だけでもお聞かせいただければと思います。

鈴木先生は、先般の震災と対応して、さまざまな心のケアも含めて、宗教の役割というのを実感されていることと存じます。そういう面を含めてお話をいただければ幸いです。

現代社会において期待される宗教者の役割

鈴木 これまで支援活動でやってきたこと、気づいたことを中心にお話ししますと、今回の震災では、宗教者の役割というものが、好意を持って取り上げられています。また、一九九五年の阪神・淡路大震災のときと比べて、ずっと宗教者

の力が大きかったという話も聞いています。丁度、阪神大震災の当時、オウム真理教の事件が起きていましたから、そういう意味でも、「宗教は危険」「胡散臭い」といった雰囲気、殊更に強かった時代です。「〇〇教」と書いたジャケツトを着て震災被災地に入ることができなかつたと聞きました、今回は皆さん、名乗って入っていますし、それに対する期待もとても大きいです。

今の我々の活動の一つに「Café de Monk」(カフェ・デ・モンク)、つまり「カフェで文句」を聞きましようという活動があります。いわゆる「傾聴」です。これは、曹洞宗のお坊さんたちが中心になって活動しています。ケーキとかお茶を持つていってお話をする中で、いろいろなことを聞くのですが、やはり皆さん、いろいろな思いや苦しみを持っています。これは、あまり知られていないかもしれませんが、「死者が憑く」という問題もあります。死者が憑いてしまえば、精神的におかしくなってしまうので、宗教者が「エクソシスト」をやるという。この「エクソシスト」は、カトリックとかじゃなく、お坊さんがやっています。その宗派はエクソシストのやり方を教えているのかとか、教義にあるのかとか、そんな話になるかもしれませんが、そういう話じゃありません。結局それも傾聴と同じで、死者に寄り添うということなのです。布教でなく、相手の心を上手く整理していく

のです。宗教者として、自分が学んできた教えを、もつと判り易くして一般化したような感じで伝える。そうやって、相手の心を上手く整理していくというのが、宗教者だと思います。

そういつたことにも深く関連してくるのですが、先ほど述べた「臨床宗教師」の養成では、参加者を宗教者に限定しています。介護士さんとか看護師さんからも参加希望が出されているのですが、入れてしまうと「臨床宗教師」ではなくなってしまうので今は遠慮いただいています。私は「宗教の力」を信じているので、これは宗教者じゃないとだめだと思っています。何教でもいいのですが、その宗派の宗教者として認定された人であればこそ、ほかの宗派の人に会ってもそれなりのことが言えるのだと思っています。逆に、「そんなのは幻想だよ。宗教者だってピンきりだよ」と言われることもあるのですが、とりあえずそこに一つの線を引いてやっていきます。

そうした中で、今日のテーマになっています「葬送儀礼」という問題を、「神道文化」という視点で考えていくときの関心について、最後に触れてみたいと思います。

大阪の千里に国立民族学博物館がありますが、その初代館長だった梅棹忠夫先生が、宗教を分析するときに、「メーカー」と「ユーザー」という言葉を使っていました。「メー

カー」というのは教団で教義を作っていく立場の人。それに対して信者さんを「ユーザー」と呼ぶのです。「メーカー」と「ユーザー」の間には、「ディーラー」がいて、これが宗教者だと言うのです。私はこの説明は、とてもわかりやすく宗教を捉えた比喻だなと思って時々使っています。「ディーラー」って各教団にとつてとても大事な位置だと思っています。「ディーラー」がへばだつたら、その教団は潰れると思うのです。自動車会社でいえば、トヨタが何であそこまで大きくなつたか、世界のトヨタになつたかというのと、ディーラーの役割が素晴らしかったせいだと思います。「ディーラー」が「ユーザー」のニーズを上手くまとめて、「メーカー」に伝え、「メーカー」の方針を「ユーザー」のニーズに合わせるようにしている。「メーカー」と「ユーザー」の間を取り持つているのは「ディーラー」の力なのです。これは宗教でも同じです。やはり信仰していくべき教えは「メーカー」が作っていく。しかし、現実信仰している人たちの現場では、その教えが曲げられていることが当たり前にあるわけです。例えば、「いぼとり地蔵」なんていうお地蔵さんは、仏教の教義にはありません。そういう現場があることを、「ユーザー」と「メーカー」の間を調整して「ディーラー」がどう取り持つのかということです。

そういう意味でいうと、神道の立場からも「葬送儀礼」に

積極的に関わられている現場がある点を再確認する必要があるのではないかと思っております。十年程前の統計調査では、仏式葬儀が九四％でしたが、去年の一月時点の調査ですが、今、仏式がどのくらいだと思われますか。私は正直な話、直葬も多くなつたと聞いていましたから、七〇％くらいいつていれば良いのかなと思っていました。

佐野 そんなに変わっていないのではないですか。

鈴木 そうです。九二％でした。十年くらい前が九四％で、今が九二％。確かに質に問題があるのかもしれませんが、たつたそれだけの違いなのです。神道もキリスト教も一％程度で、ほとんど変わっていない。直葬なんて、わずかな数％でした。

直葬が三、四〇％くらいになっているのかな、どうなのだろうと思つていたら、全然なつてないのです。確かに現実には、都市部では直葬が多いところはあると思います。四〇％越えるような場所もあるかもしれませんが、日本全国に比べると、ほんの三％ぐらいにしかありません。本当に少ないです。

それはやはり「宗教者に葬式を出してもらいたい」という気持ちがあるからだと思います。そこで仏式が多いのは、やはり近世以降の檀家制度の名残だと思います。逆に無宗教葬でやるとどうなるか。実は、私の近しい人の無宗教葬に係っ

たことがあるのですが、すごく困りました。儀礼がないのです。宗教的儀礼無しで死者を送ると間が持ちません。儀礼というものが、「死者」としつかりと対峙するシステムとして、大いに役に立っているということを、改めて実感しました。無宗教の結婚式にも出たことがあります。人前式も見ました。結婚式の場合は「楽しい」だけで終わるので良いのですが、お葬式で宗教的儀礼がないことの空しさを痛感した次第です。そういう意味でも、今も宗教者の出番、「ニーズ」があるわけです。

今、「神葬祭」について、全国の神社庁にアンケート調査をしています。なぜそういうことをしているかというと、私が見ているある調査地には、すぐお金を取るという評判の悪い寺院があります。そこでそのお寺から、同じ地域の他宗派のもう少し金を取らないところに人が流れて行きました。そこが一杯になると、次は「神葬祭」に流れて行きます。現在その地域は、「神葬祭」がすごく増えています。神社庁にお願いしたアンケートで、「何で神葬祭が増えるのですか」ということを聞いているのですが、「安いから」という回答が多いです。ただ安いというお金の面も確かにそうなのですが、ここにもう一捻りある試みをなさっている神職の方もいらつしやいます。

神道は教義の縛りが他の宗教ほど明確になっていないとこ

ろがありますが、ある宮司さんは、いろいろと工夫して神葬祭を行っています。ある意味、「ディーラー」としてですね。その地域では、神仏分離のころにお寺が出て行ってしまった関係で七〇%以上の人が「神葬祭」なのです。その宮司さんがどうやっているかというところ、やはり「仏教」を勉強していると言っています。つまり仏教での「死者」への対峙の仕方は参考になるそうです。しかし、「仏教」そのものの真似をしているのではなくて、自分なりにそれを「神道」としてどうあるべきかを考えながらやっていて、もちろん神社本庁で出している『神葬祭の栞』も参考にしつつ、当該地域のいろいろな地域的特性に配慮した形でその方法を考えていらつしやいます。そうした感じで、現在「神葬祭」が行われている地域では、その地域の神職の方々の地域なりの工夫がなされているものと思います。私は、そうした神職の方々にお会いして、直接お話を伺いたいと思っております。今後は、できるだけそういう人たちから聞き取りして、どういう苦勞をされて、どういう祭式がなされているのかについて、まとめていきたいと思っています。本日のテーマの「葬送儀礼と神道文化」に現実に取り組んでいこうとしている方たちが、具体的に何をしているかを、今日の座談会でご紹介できればよかったです。が、「群の死者」だけでない、「個の死者」への神社神道からの対応のロジックみたいなものの一つのヒン

トを、得ることができるのではないかと思っています。

ともかく、いくら世の中がドライになっても、宗教がなくなることはないと思います。世間では、昭和五十年代の毎日新聞などを始めにして「死後の靈魂を信じますか」という調査が続けていますが、信じないといっている人が二〇〜三〇%、それ以外は「信じる」もしくは「わからない」です。それから分かるように、死後の靈魂とか、そういうものに対する信仰は、戦後の日本では、今のところも変わらず一定の程度が維持されていました。それに如何に対応するかが今後の課題となるものと思います。

現代に活きる神道の潜在力

武田 ありがとうございます。只今、宗教に対する「ニーズ」、それに応えなければならぬ我々のミッションについてお話をいただきました。それは同時に、神社界に対する「宿題」の提示でもあったと思います。このことにつきましては、最後の締め括りとして、佐野先生にレスポンスしていただくことにしたいと思います。

実は、池上先生の論文で大変感銘を受けた一節がございます。

死者を媒介とした生者たちの絆の再構築こそ、今後の宗教研究の重要なテーマである。

さらにもう一カ所、沖縄の沖縄キリスト福音センターでフィールドワーク『悪魔と聖霊の舞台』の締めくくりの一節です。

…臨み苦しむ人たちの力の源泉として、悪霊や精霊が生き生きと活躍する舞台が整えられつつある。そしてその上手のほうからは、未だ名前も持たない得体の知れぬものたちは、ひそかにしかし自信に満ちた確実な足取りで登場しつつあるのだ。

意味深長な結びの言葉として感銘深く拝読いたしました。この点も踏まえまして、ぜひ池上先生のお話を承りたいと思います。

池上 そんな偉そうなことは言えません。先ほど申し上げたことに尽きるかと思います。ただ、今の鈴木先生のお話を受けて言えば、この日本では、仏教が死者のケアに関わるという文化はかなり根強いと感じています。だから、そこに「神葬祭」のマーケットを無理矢理広げていくこうとするような道は、神社界の「今後」ではないと思います。

先ほどから言っている「個人主義化」していく社会、非常

に「プライバシー化」していく社会というものは、個人が大事にされる近代の一つの理想ではありましたが、「自己中心主義」というものに陥りやすい社会でもあるということだと思います。それが今、いろいろなところで問題になってきています。他者への思いやりとか、他者への関わりとか、そういうものを一体どうするのか。これは、宗教者だけではなくて、我々が一番考えないといけない部分であり、そこにどういう「倫理性」を取り戻していったら良いのかという問題でもあります。

そのときに一般の人々が「神道」とか「神社」に寄せる思いは、どんなものであるのか。ポジティブな思いとして、やはり「寛容性」とか「柔軟性」、そして「風土」、「自然」、そういうものの深いつながりではないでしょうか。外国人なんかも日本の神社に来て、そういったものに触れて感動する。そういう話をよく聞きます。「潜在力」が非常に大きいと思います。それを「自己中心主義」を克服していくときに、どういう形で発揮するのか。そこで「日本人」とか「日本文化」とか「伝統性」といった言葉を、上から一気にかぶせようとすると、無理も出てくるし、イデオロギー的な論争の中にも巻き込まれていく可能性がある。現にそんな危険性を持っていると思います。

ただ、一神教文化にはない、「死者」あるいは「他者」と

の関係への敏感な配慮を必要とする文化的な地盤が、この日本には、まだまだ根強くあると思います。だから、別に葬儀を受け持つというような形ではなくても、死者と生者、亡くなった人たちと生きている人との関係性を含めて、そういうものの中で結ばれる「倫理性」のようなものを、「寛容性」とか「柔軟性」とか「自然」「風土」など、神社や神道にイメージされるものと結びつけながら回復していく道が、必ずあると思います。硬直した政治的強制や、「日本の伝統かくあるべき」というようなところに縛り付けるのではなく、日本の神々・日本の神社の持つている、ある種のおおらかさというか、そういうものを生かしていくような道があるのではないか、と考えています。

武田 ありがとうございます。次代の神社のあるべき姿について、温かい言葉をいただきました。

最後になりましたが、佐野先生にお願いをしたいと思います。佐野先生が宮司をお勤めの瀬戸神社のホームページに、「神道入門講座」のページがご覧いただけます。そこに私が大変感銘を受けた一節がご覧いただけます。朗読させていただきます。

個人の祈りはどんなに強くても小さな祈りです。大きな祈りの中に包まれることによってそのわがまを消し去って、ご神慮に叶う祈りに昇華させていただくことがで

きるのです。その力の源は神社の祭りが古来から公の祭りとして執り行われてきた大きな祈りの伝統に基づくところに存在しています。

この言葉の内容も含めて、池上先生・鈴木先生のお話に應えるような形で、佐野先生からしめくくりのお話をいただきたいと思います。

佐野 両先生のお話も含めて、これからの展望になるような話をまとめてという非常に高いハードルの課題を武田先生からいただきました。

鈴木先生のお話にありました、被災地での「エクソシスト」の話を受けてですが、被災地のようなシビアな状況でないにしても、このごろ交通事故が続くので厄除けをしてくださいということ、しばしばあります。ではそれに対応するどんな「エクソシスト」的な技法があるのか。一般の神社では、ご神前にこういう願いを持ってきたので、何とかご神威を以て叶うようにしてくださいという祝詞をあげる形で概ね済ましていると思います。しかし、祝詞作文を如何にするかというよりも、そういう方が来たときの、いわばお迎えからお送りするまでの応対の中で、それが行われているのだと思っています。ご神前への儀式の部分は措いておいても、やはり人間と人間との交流の中で、対処がなされているのが現実

でしょう。さつき「個」と「群」の話も出ましたが、必ずしも「群れの祭祀」だけではなく「個の祭祀」にも対応しているのです。如何にして「個々の人たち」と、「神道家」として付き合いをしていくかは、神職にとつて現実に直面していることでもあります。

そういったことを前提として、「個人主義化」が非常に進んでいる社会であつても、それ以前までと変わらず神社にお参りになる方々はおられます。あるいはお参りにならないでも私たちに地鎮祭を頼まれる方、あるいは亡くなった方の十年祭をやりたいという方も来られます。例えば、十年祭をするのですが、お供え物は何を用意したら良いですかと聞かれることがあります。型通りで言えば、御神饌というのは、お米と御神酒、海のもの山のもの、魚とか海藻類とか野菜とかありますけれども、御霊のおまつりですから、どうぞ亡くなった方が一番好きだったものを優先してくださいということをお私に言うようにしています。祭式の教科書には、「こういうように説明する」とは書いていない。むしろ、祭詞はこうあげる、作法はこうするなんてことしか書いていない。そういった意味では、さつきの「ユーザー」と「ディーラー」の比喩は非常に面白い見方だと思いました。

しかし、最近の「ユーザー」は、運転まで「ディーラー」に頼る傾向を感じます。自分の家の「ドライバー」は私で

す。我が家のご先祖のまつりの主体は私です。あるいは、地鎮祭をするときなら、地鎮祭の主催は私です。今、そういう主体的な意識がない人が多過ぎるのように感じます。それを受け入れてしまう宗教者にも問題があると思います。頼めば受け入れてしまう。むしろ、宗教者が「ディーラー」よりも「コンビニ」になっているのではないのでしょうか。せめて「コンビニ」ではなくて、田舎の「何でも屋」くらいに返ることも必要じゃないかと思っています。宗教者として、やるべきところはしっかりとやるけれども、自分の家のまつりは自分自身で責任を持つてもらう。そういう雰囲気や知識というものを、一般の人にも身に付けてもらう、そういう「ユーザー」に対してのアピール・工夫をもつとしないといけないのではないのでしょうか。そういった工夫の中に、池上先生のお話された、神道の持つ寛容性とかを組み込み、それを生かしながら活動して行く、神道にとつての教化活動が進めていけないものかなと感じた次第であります。

さつき最後に武田先生が読み上げたものも、「個の死者」「群れの死者」の話題からすれば、「個」と「群れ」をいかに結びつけて調和させるかということにつながってくる。「個」を「群れ」の思想に結びつけるときに、単純なイデオロギーの強制になることがないように注意をしながら進めていく、そういうものが上手に形作っていければいいなと思っ

ています。以上、武田先生からの課題への答えとさせていただきます。

武田 先生方、ありがとうございます。

先生方の貴重なお話を伺いまして、「生者と死者との絆」の問題が、同時に「人と人との絆」の問題そのものであることを実感致しました。また、「個」と「集団」の絆を繋ぐことが同時に「過去」と「未来」の絆を繋ぐことでもある、という筋道の存在も、改めて通関させていただいた次第でございます。

私自身、本日の課題につきましては、一匹の「迷える子羊（豚）」として、種々考えあぐねてまいりました。お蔭様をもちまして、本日の先生方のお話から、さまざまな標（しるべ）や手がかりをいただくことができたと感じております。本日はまことにありがとうございました。（拍手）

以上